

一目でわかる
東京の一週間

週刊案内新聞

復刻版全1巻

関連
図書

東京日日新聞社 刊〔1949年～1950年〕

週刊東日 復刻版 全2巻

東京日日新聞社は1949年1月、一般読者向けに『東日ダイジェスト』を創刊した。各号タブロイド判の基本4頁立てで、芸能記事や野球記事をはじめ、政治・経済情報など当時の世相をふんだんに伝えている。その後『週刊東日』『東京レポート』と改題した。いづれもほとんどの研究機関に所蔵されていない貴重資料である。本復刻版は1949年1月発行の第1号から1950年12月発行の第101号までを収録する。ジャーナリズム史、文化史研究をはじめ広く戦後史研究に供する。

体裁ⅡB4判・上製・総496頁

推薦Ⅱ土屋礼子

推価Ⅱ58,000円＋税

新大阪新聞社 刊〔1946年～1949年〕

夕刊新大阪 復刻版 全10巻・別冊1

本紙は1946年2月4日に創刊された横長のタブロイド判夕刊紙である。大新聞の紙面には文化欄がほとんどなかった時代に投書欄と学芸欄、さらにはスポーツ欄に大きなスペースを割き、文化新聞として独自の地位を築いた。学芸欄には武田麟太郎、石川達三、大佛次郎、田村泰次郎らが連載小説を発表し、地方紙でありながら全国レベルの多くの作家が文芸批評や作品を寄稿している。

体裁ⅡA3判・上製・総2838頁

別冊Ⅱ解説・主要記事索引

解説Ⅱ浦西和彦

推薦Ⅱ田辺聖子・谷沢永一・山内祥史・山本武利

推価Ⅱ300,000円＋税

うるま新報社 刊〔1945年～1951年〕

うるま新報 復刻版 全6巻

『うるま新報』は、日本の無条件降伏の前月に創刊された。唯一地上戦の終わった沖縄にあって、印刷機もなく当初はガリ版印刷で発行、防空壕の中から活字をひろい集め第6号から活字印刷・タブロイド判になった。当時の沖縄では、ニュース源は米軍政府からのものが多く、本土からはラジオ放送を傍受して記事にしたものが多い。各地の収容所で窮乏生活を余儀なくされていた県民にとって唯一の情報源であった。当時の県民の姿を知る貴重な資料として復刻刊行。

体裁ⅡB4判・上製・総1,962頁

解説Ⅱ新崎盛暉・丹野喜久子

推薦Ⅱ小川政亮・我部政男・福島鑄郎・宮城悦一郎

推価Ⅱ168,000円＋税

表示価格はすべて税別

不二出版

T 112-0005
TEL 03-59811670
FAX 03-59811670
振替 00160294084

2019/1

週刊
（毎月曜発行）

8月第4週
月火水木金土日
25 26 27 28 29 30 31

案内新聞

“一目でわかる
東京の一週間”！——

映画、演劇、音楽、美術、娯楽、
スポーツから、文化講座、行事、
集会、経済、宗教、求人・貸間まで
東京の情報を満載
敗戦後の世相を軽妙に斬る
週刊情報誌！

手短に列挙された内容は、後の情報誌
『ぴあ』（1972-2011）を思い起こさせる
——土屋礼子氏推薦文より

一目でわかる
東京の一週間

案内新聞

1947年4月～1948年4月

復刻版 全1巻

体裁 B4判／上製／168頁

推薦 土屋礼子（早稲田大学政治経済学術院教授）

定価 25,000円＋税

ISBN978-4-8350-8273-8

刊行 2019年1月

不二出版

土屋礼子

一目でわかる 東京の一週間

週刊
(毎月曜発行)

案内新聞

5月第3週号
昭和22年5月12日(日)発行

一 部 券 円
 20 通分 20 円
 50 通分 50 円
 外 二
 別添一連 付 1 円 20 銭

発行所 **社内新聞社**
 東京都港区芝新橋一丁目八番地
 私書通東京中央局第185号
 電話 銀座 (57) 0934 番
 電報 社内新聞 社内電

内 容
見 本

今週の新映畫

お祭りも文化の衣



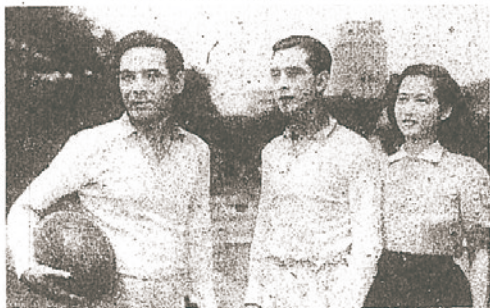
『百万人の音楽』より

女優須藤美子……原作
 (松竹映画) 原作
 長田秀雄 脚色・
 田代百合子 監督・
 依田義賢 大正初
 年、坪内逍遙博士
 の主宰で文藝協會
 が組織された、わが
 國最初の新聞記者
 運動の起つたこの運
 動に参畫した時の
 早大教授須藤中
 村は、募集した研
 究生の中で、女性
 を發見した、この女
 性は彼の運に強烈
 な情熱の火を點し
 た名女優松田須藤
 若き日と名を改め
 師匠仰ぎ、愛人と
 慕う抱月の面影に
 ひとたの情懷に生
 きて、戀に死んだ
 一丁の情懷が通し
 絹代の生涯を動か
 す心作。田中
 絹代 (山縣志保)

◎初戀場所……大映作
 品。脚本 御本
 三郎 監督 小石
 栄 主演 上原謙
 三條雅也 某洋行の若
 君殿下が、田崎隆
 吉という一市民と北
 北の或る學の一研究
 員として赴任す。其
 處には赤々と心な
 る心算があった。愛
 情、嫉妬、憎しみ、悲
 しみ、人間の心の盡
 くの明暗……それは
 殿下にとっては絶
 ては絶ての御難題であつた
 殿下は、遂に責任を
 己の一代に背し、必
 ず歸つて來る……見
 込まれる運で、殿
 下のおに、葉代子
 が現るそのは……

◎誰が誰を……(後
 編)新東宝 作品
 岡田を逃れ、多
 喜子 (野千鶴子) の
 妾今何處へ手を求
 める。ある娘と之
 の縁外行方を探し
 進……一瞥、伎
 心の心、今歸
 が返る程、明るく
 笑ひ、全篇

◎愛する男の……



大映作品「初戀物語」より



新東寶作品「誰か夢なき」より

四、日比谷公會堂。第一位
 「今ひとびとの」 第二位
 入選作同映畫に對する投票
 者より五名名指す
 試寫研究会。廿日一時—五時
 万世書院交通文化博物館。東
 郡教育映畫「マタの木の
 話」二卷「キヤベレ」六卷、
 大映天竺「キヤベレ」の
 花婿、一卷、東京映畫館天
 然色試作映畫一本。映畫終
 了後制作スタッフの檢討會
 會員制。主幹日本院映畫技術
 協會
 映畫と輕音樂の夕。廿四、五
 時。万世書院交通文化博物館
 映畫「今ひとびとの」他に

夏枯草の興行界で、藝藝に
 有る有る樂座を連日諸員の客
 座に盡しと新演説の長谷川一
 郎と云ふ男

女太の文藝座が、一軍
 の東京公演に女の一生活
 びに於いては難を聞かぬか

移動劇場演出 十九日、
 大森第一小學校父母會。廿
 一日、杉並第二小學校母の會
 廿三日、保谷第一小學校母
 の會

ス・ポ・リ・エ・テ・ア・リ・エ

足や手の無

南門から入ると、とた
ラジオがびつくりする程
心をかき立てるような楽
の調べを傳へて来る。患
心を反映しているような
だ。

顔腫れ病舎一斷股者が多
容されてゐる。つまり足
手の無い人たちだ。昔は
名の示す通り、退院後の
生活に事餘かぬようにと
電車乗りなどが出来る處ま
探したのが、今日の言が
事情では、顔腫れどころか
リツとしていても空腔にま
と云う、世相の荒波は舐
病者にも迫つてゐる。一

無^い人^ら達^たの訓^し練^{れん}
 眞^ま女^{にょ}は見^みてい^て涙^{なみだ}
 ち^の足^{あし}、手^ての失^しわ^れれ^た
 う^のに空^くろ^くである^{こと}。この^の
 め^のも^のの多^{おほ}き^きな^な羞^は
 づ^の、正^{ただ}眼^{まなこ}にた^たえ^えな^ない^い姿^{すがた}
 下^{した}の板^{いた}の間^まにベ^べタ^たリと^と
 膝^{ひざ}から下^{した}が老^{おい}衰^{すい}が^がいた^{こと}。
 女^{にょ}右^{みぎ}脚^{あし}の太^ふさ^さも^も露^は露^は
 自^{みづか}身^みで^で、切^き断^{たん}す^す所^{ところ}の老^{おい}
 脚^{あし}で^で登^{のぼ}き^き直^{ただ}し^して^て、
 下^{した}の^の傍^{はた}を^を、慌^{あわ}し^し
 帰^{かえ}還^{へん}が^が通^{とほ}り^り通^{とほ}る^る。
 引^ひ揚^や患^わ者^{もの}の
 子^こ供^{ども}達^た

うづ

断肢

うづ

日毎に木
が身に沁み
た。街に酒
徒しく轉つ

東二病院
★訪問記★

五輪に抱息を
ち、どうこの木枯しの
間て居るだらうか。

玉電一號通の停留所
南文一駅通、國立東京第
足は向う田舎道を歩く足
足は重く、心は兎角しず

者につれ
く 傷
木枯
ちであつた。
元澤のゴルフリン
は、ミリスグズ
海軍軍校附
所であつたが、一
現在に國立病院として
前回は起伏せん
の定りの探掘 内
時の建築物の例に洩
急的な安否調査は
はつたとい、相違な

[illegible]

食事に等しい。現在に耐えられぬが、そういう我々に何よりも欲しいのは暖い同胞愛」と社會の正常な理解を要する元軍人志士のベットの呼びは悲愴でもなく、おもひびきよかに空を叩けは示んばとんでめいる

これは「碧雲」という院内難題だといふ。患者、看護婦、職員の仕事、なか／＼立派に出てゐる。この「院内新聞」という句のガリ版内紙といふ。患者といふ、これ等の機關誌を発行し、お互ひに奨励し、精神が互直前に燃えてゐる。彼らの自治機關として東海がある。以上は凡そその文化部、社である。月に二、三回、それでも暇時間、誰かの訪れがあるが、長い療養生活、加えて不機嫌最盛の時を察み、怯懦、神経過敏など有

▲第17号（1947年8月18日発行）



「何處へ行こうかしら？」一寸お待ち
家内新聞を見るから……」 村山しげる